

童話は何處にあるか

— 童話の本質 —

石井庄司

「何かよいお話の本はございませんでせうか。子供にせがまれて困つて居ります……」といふやうなことを、よく世の若いお母様方からきかされる。桃太郎の話・花咲翁の話・一寸法師の話……自分の知つてゐる限りのお話はすっかり話して度々繰返してしまつたので、子供に飽かれ、至急種本を仕入れたいといふわけである。かやうな質問は單に若いお母様にかぎらず、幼稚園や小學校の先生方からも、時々きかされることである。

「二冊も三冊も讀んでみても、子供に聞かせるやうなお話の一つも見つからないのです。みんな本を讀んだらいいでせう？」と訴へて來た若い保姆の方がある。お話はどこにあるのかと、多くの人々が探し求めてゐる。

一體、童話は何處にあるか。これは仲々大きな問題である。早速役立たせるためで種本を探す意味に於てばかりではなく、むしろ童話の本質を考へようとする者にまつて、大きな問題である。そして此の事は、種本を探す仕事よりも、一層重大な問題なのである。しかも非常に多くの人々は、外に求めるに急であつて、此の童話の本質といふやうな内の問題は殆ど等閑に附して顧みて居ないやうである。そこでいつも失望し落膽し種切れを託つことになるのではなからうか。

「童話は何處にあるか」

「いふ間に對して、自分はやゝ逆説的に」

「童話は何處にでもある」

「答へたい。いふころは、此の問題は、かやうに外部に向つて出す問題ではなくて、もつて内部に向けらるべきものと思ふからである。」

「よいお話はありませんか」人に訊く前に、一般に童話といふものゝあるべき世界について、考へてみなければならぬのである。

四歳の子供にまつては相當に重い椅子を一人でギーギー引きよせてびたりテーブルに喰ツつけた。クッションを平にしてから、息をはづませて、脇掛から横さまによち上つて、きかりクッションの上に懸り、足をふんばり兩脇を張つて、意氣込んでゐる。傍で新聞を見ながらそれきなく眺めてゐた自分に向つて、「ガソリンを入れて下さい」ミ、大きな聲で叫んだ。椅子を引つぱり出した頃から、一體何をするのかミ注意してゐた自分にまつて、ガソリンを入れてくれさいふ此の要求には全くほゝゑまされた。そこで咄嗟の間に、手にしてゐた新聞を巻いた管でテーブルの下、子供の足の置いてゐる所へ向つて、シューミさしてやつた。よろこんだ子供はプープーミ脇を動かしてゐる。それからこの小さい運轉手は更に「ヘッドライト、こもつてゐますか」ミ訊いた。ヘッドライトはヘッドライトのこみであるが、それが何處にあるのかよくわからないので、茫然としてゐるミ、彼は矢庭に椅子から下りて、注意深く腰をかゞめてのぞき込みながらテーブルの前に出て來た。そしてヘッドライトだこいつて示したものをみるミ、それはテーブルの脚の根の角にある籐で造られた二つ

の輪であつた。成る程、ヘッドライトのやうに両方で眼をむいてゐる。さては平生自分の留守の間に此の部屋に入り込んで遊び慣れた自動車遊びミわかつたのである。

ロバート・ルイ・ステイヴンソンが「蒲團のお國」といふ童話の中で、病氣で寝てゐる時、ベッドに玩具をありつたけ持つてきて、鉛の兵隊が色々の軍服を着て練兵し、夜具の間や岡を抜けて通るのを見守つたり、また敷布の海のおちこちに多くの艦隊を送り出し、また町を造つたりすることを歌つてゐるが、これは決して詩人のこしらへごこではなくて、子供の普通の生活であると思ふのである。

日當りのよい庭の片隅に一枚の莫座を敷く、それはすぐお家になつたり、學校になつたり、また汽車や電車の發着するステーションになつたり、時には海中の孤島フエンタジイなるこゝもある。子供の世界は實に自由である。此の自由は一に子供の想像力に據る。此の自由の世界に入ることの出来ないものは、童話の世界を窺ふこゝも出来ない。童話は何處にあるかを探す代りに、自分が果してかやうな想像力を持つてゐるかどうかを考へてみたいのである。外に向つての間ではなく、内に向つての間でなければならぬわけである。そして一度此の想像力を持ち得たものにまつては、童話の世界は何處にでもあり得るこゝとなる。そして、「想像力を賦與された者は言はずガイスター精靈を呼び出すこゝが出来る」といつたショーペンハッパーの言葉が今更のやうに身に沁みて感じられるのである。

三

以上述べた童話の世界は、童話のあるべき世界ではあるが、それだけで直ぐ童話そのものといふこゝは出来ない。子供の世界に浸つてさへ居れば、それで自ら童話が成立するやうに考へられ、まだかやうな子供の世界の醍醐味に入るこゝこそ肝要であるやうに思はれるこゝがある。夏目漱石の「草枕」の始めに詩や畫の境地を述べて、住みにくい世から、住みに

くい煩ひを引きぬいて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩であり、畫であるこいひ、すぐ次に、「こまかに云へば寫さないでもよい。唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。著想を紙に落さぬこも響鏘きうそうの音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る」。こいひ、「無聲の詩人」「無色の畫家」こいふやうな言葉を用ひてゐる。これは議論としては誠に面白く、所謂東洋的で神祕である。しかし藝術論としては、半面の眞理にすぎないやうに、いま想像力が與へられて、自由に子供の世界に遊んで、陶然とうぜんしてゐるだけでは、童話はまだ成立たない。童話は「こまば」によつて始めて現成する。「こまば」のない童話こいふものは考へるこも出来ないのである。

言靈ことばたまの幸まきはふ國こくにまこいはれて來た我が國でも、久しい間に、「こまば」は傷められ、さいなまされ、磨り減らされて來た。童話の世界からこそもう一度、新鮮な、純正な、「大和こまば」が生れて來なくてはならないのである。しかも、今の童話にはさういふきざしが見えない。

こゝでもう一度、童話は何處にあるかこいふ問を改めて見直さなければならぬ。大人の讀物をそのまゝ書きかへてのけば、すぐ子供の童話が出来ると思ふのが、抑々の大きな誤りである。面白いこか、をかしいこか、また悲しいこか、淋しいこかいつた話の筋だけが決して、童話のある場所ではない。身のためになるこか、もの知りになるこかの話だけが童話ではないのである。童話の在處がかやうな、外的な方面に置かれてゐるために、「こまば」こいふ方面は全く顧られぬのである。

「よく晴れ渡つた空には飛行機が高く高く飛んでゐます」。これはある童話の書出しの一節である。抽象的な形骸の羅列であつて、童話ではない。大人のこまばであつて、まだまだ子供のこまばにはなつてゐない。

「京の都の、あるお公家さまのおやしきの裏庭の片すみに、まつ白な菊が一りん、大きくさいいてゐました」。

これもある人の童話といふものゝ一節である。なんこいふまごころこしい表現であらう。こんな子供のこゝばがここにあらであらうか。

「青く晴れた十月の或午前でした。」

これでも童話なのであらうか、驚く外はない。

「みち子の五年生のときの三月に、東京から来た大野さんといふ子が級へはいつて来ました。」

これが幼年童話ミ銘打つた作品の一節である。子供ならば、大人つて、さうしてかうも文がまづいのだらうといふであらう。

「母は流して米をさいでゐた。僕はシャツだけきて庭で小さい二三男をあそんでゐる、弟が外で、『母宮下の家の馬、死んださい』と大きな聲で言ふ。母は『馬死んだつてい』と言つた。……足は焼きつくほぎ暑い。いつさゝ／＼と、一人で家の背戸の道を走つた。」

これは雑誌赤い鳥にある子供の文である。兩々相比べてみれば、思ひ半ばに過ぎるものがある。しかし、拙いの手のはまだいゝ。今日一般に非常に多く流布されてゐる安値の繪本雑誌にある言葉に至つては、實に戦慄を覚えしめるものが多い。子供の魂は根柢から壞されてゆく。なんこいふしなければならぬ。尤も今の世の中では、かういふ粗悪なものゝはびこるのも致方がないのであらう。

そこで、世のお母様方に申し上げたいことは、よいお話を外に求めず、まづ皆様の心にきいて戴き、次に皆様の「こゝば」を働かせて戴きたいといふことである。

英文學者で、宗教に造詣の深い中村詳一氏が、十數年前にある雑誌に、「時計」こいふ詩を發表せられたことがある。今、

手許になく、その全文をお眼にかけるこゝが出来ないので残念であるが、なんでも、さる日曜に子供ミ一緒に家に居て、子供のお守に困つた時のこゝであつた。なんもか退屈をまぎらさうとて、机上にあつた置時計を持ち出して、「カッチン、カッチンいつてるでせう」こゝいつて見せたこゝろが子供の眼は急に輝いた。それに元氣を得たので、「その長い針がこゝまで来るミチーンミなるんだよ」こゝいふと、アハハハ……ミ子供はよろこぶ。何が面白いのかわからないが、また繰返して「今度はチーン、チーンミ二つ鳴るんだよ」こゝいつた處が更によろこんだ。そこで次々に繰返して、終に十二時にまで至つたこゝのであつたと思ふ。實に簡単なこゝではあるが、こゝに童話の世界から生れた、まこゝの「こゝば」がある。詩であり、また一篇の童話である。

中村さんの詩を見た頃であつた。早稻田裏のさる古本屋の店先で見た光景を忘れるこゝが出来ない。若いおかみさんミいつた人が、針を運ばせながら、上り框にもたれてゐる五つ六つの女の兒に、しづかに一寸法師の話をしてゐた。何がなしに棚の本を引き出してゐた自分は、ふもその話聲に聴き入つて了つてゐた。話は間もなく終つたが、その時、いかにも嬉しさうに「おばちゃん、ありがた」こゝ言つて、吾が家へ駆け戻つた女の兒の後姿を見送つて、また満ち足りた心の婦人の様子。いくらありふれたお話であつても、本當の「こゝば」で語られるさき、それは永久に新しいものミなる。

童話は何處にあるかこゝいふ問題は、卑近であるが、しかも無限に深い意義を持つ問題である。(昭和一〇、二、二八)